



Title: 狩野良知の読みは？その2

❖ 軍配は「りょうち」に？

ということで、前回の続きです。

読んでない人のために前回の復習を。狩野良知の読み方について、図書館にある人名事典の類では「かのうりょうち」としか載っていない。反面大館での各種資料では読みを示していないのが多く、「よしとも」と書いているのが2件あった。果たしてどちらが正しいのか、という疑問でした。

私としては郷土史研究家の方に何人か連絡を取って教えを乞うつもりでしたが、その前に先方から助太刀が現れました。『大館の人・事典』で狩野良知の項を執筆した清野宏隆氏です。わざわざ書いていただいたものを含め各種資料をいただき、その上来館して丁寧に説明もしてもらいました。ご足労をいただき恐縮でしたが、一対一の贅沢な講義をしてもらった気分です。

まず、良知本人がどう名乗っていたか、これについては清野氏が決定的な物証を得ていました。昨年10月から12月にかけて、東京大学駒場博物館において「狩野亨吉生誕150周年記念展」が開催されました。これを観に行った清野氏は、父良知が子の亨吉に宛てた電報頼信紙（後の電報発信紙）に気付きます。カタカナで記入するそれには発信人として「カノウリャウチ」と明確に記入されており、ここから本人が「りょうち」と言っていたのは間違いないことが確かめられました。

だからといって、ひとから「よしとも」と呼ばれていなかったのかどうか、それは分かりません。記録に残っていないものが実際に存在しなかったかどうかの証明は難しいのです。戊辰戦争で大館は町を焼かれ、その後良知は大館を離れたわけですが、当時大館の人たちが多く「よしとも」と呼んでいたことだってあり得ないわけではありません。ありえないような気もしますが。そのうちどこからか古い書き付けが見つかるかもしれないし、どこかに小さいころ江戸時代生まれのおばあちゃんから狩野家の人たちの話を聞かされたなんて人がいるかもしれない。とにかく現段階では、「りょうち」は間違いないが、「よしとも」を否定しきれない、ということらしいです。

個人的な意見としては、大館に良知と亨吉を敬愛する人たちがいる。その人たちは訓読みで柔らかい語感の「よしとも」と呼びたい性向がある、ということでもいいんじゃないかと思うのですが。だいたい昔の人の名前は何かとややこしいですよ。ね。幼名があつて元服すると名前が変わる、他にも号（雅号）を名乗る例が多くありました。狩野良知の場合、幼名は国松、後に深蔵、号は広居、羽化。良知というのも号のようです。ちなみに、松下村塾から発行された『三策』の著者名は狩野深蔵でした。

❖ 『三策』と松陰

清野先生（清野氏ではどうも収まりが悪く、以下先生です）によるもうひとつの論点が、吉田松陰は『三策』を目にしていないのではないか、ということです。私も各種の資料にあたった結果、「『三策』を松陰が入手し後に松下村塾から出版された」と書いてしまったので、責任を感じます。

狩野良知が『三策』を書いたとされるのは安政元年（1854）、印刷されて現存する最古のものは明治元年（1868）版の松下邨（村）塾蔵版とされています。その間松下村塾におそらく写本が渡ったのは事実でしょうが、村塾で松陰が指導に当たったのはわずかに安政4年（1857）から5年の1年余り。そこで松陰が『三策』を講じたという記録も、刑死する安政6年（1859）までの間に同書を読んだという記録もありません（松陰はメモ魔でした）。二人を結びつけるのは難しいようです。清野先生の受け売りですが。

それでも、1歳違いの同時代人としての良知と松陰、しかも嘉永5年（1852）に松陰が大館に足跡を残しているとなれば、なんとかふたりに縁があったと思いたいのは世の人の常ではありません。

ところで、駒場博物館の狩野亨吉展のチラシ・ポスターの題字には、亨吉11歳の習字作品が使われています。見事な字ですが、気になったのは「吉」の字で、上部分が土でなく土の形になっているのです。実は吉田松陰も同じように書く人でした。関係ないですが作曲家の吉田正も。

昨年が亨吉生誕150周年なら、今年は良知没後110周年の年です。

ついでにとっては何ですが、中央図書館の駐車場に入る車の一部の方々、ウインカー出しましょうね、危ないから。 （陽）